



市内各所で幟を掲げ、立藩400年をアピールしている



園部藩主小出吉親(徳雲寺蔵)

**ファースト天神、
ラストキャッスル**

「ファースト天神」とは、南丹市園部町にある生身天満宮のこと。平安時代前期に学者・政治家として活躍した菅原道真を祭神とし、その起源が道真存命中の901年に遡るとされることから、日本最古の天満宮としてこの名がついた。道真が太宰府に左遷された後、道真の八男、慶能の養育を託された

市中部にある園部城跡を指す。豊臣秀吉の縁戚で外様大名であった小出吉親が、国替えによって出石藩から移り、1619年に園部藩を立藩。当初、櫓を築かない陣屋を拠点とした。幕末に江戸幕府から築城の内諾を得たものの、大政奉還によって頓挫。明治政府から改めて築城の許可を得て、1869年に櫓などを整備し、日本では廃藩置県によって城の役目を終えた。現在は京都府立園部高校

家臣の武部源蔵が慶能を園部に連れて帰り、道真の木像を刻んで生祠を建て、日夜祈っていたという伝承が残っている。江戸時代には祈願所として保護を受け、祭礼関係の記録が多く残っている。



旬 発 N I P P O N

知られざる歴史を物語る—— 「最古の天満宮と最後の城」

「ファースト天神とラストキャッスル」のあるまち南丹市。京都府南丹市が園部藩の立藩400年を機に、生身天満宮と園部城の歴史に光を当て、市民や観光客向けPRを本格化させている。

取り組みの現状や今後の展開について、南丹市魅力創出プロジェクトリーダー(農林商工部次長)の中西明広さん、地域の文化遺産の保存・展示に取り組む「森の京都『なんたん』エコミュージアム実行委員会」の今井隆史さんに聞いた。

昭和30年頃の神幸行列の様子



生身天満宮に現存する「祭礼絵巻」(生身天満宮蔵)

の研修プログラムでも地域の歴史文化遺産に関する情報を盛り込み、子供たちの歴史理解を深めていく。秋からは観光客向けのプロモーションも加速させる。

10月20日には「甦れ。生身天満宮祭礼絵巻」と題して、生身天満宮に現存する祭礼絵巻に描かれた豪華絢爛な神幸行列を再現する。江戸時代には城下で5つの山車屋台が繰り出し、500人規模の巡行が行われ、その後も昭和30年代頃までは、総勢200人を超える規模で行われてきた。現在は規模を縮小したものの脈々と受け継が



PR活動の背景には、南丹市の知名度不足がある。同市は2006年1月、園部町、八木町、日吉町、美山町の4町が合併して発足した。「それぞれの町名は知られ

立藩400年をフックに

の敷地となり、たつみやぐらやぐらもん 巽櫓や櫓門が残っている。

「ファースト天神、ラストキャッスル」はこの2つの歴史遺産を活用して南丹市をアピールしようと、西村良平市長が考案したキャッチフレーズだ。



ていても市としての知名度がまだまだ低く、南丹市を象徴する魅力的なブランドが生まみ出せていないのが悩みだった」と中西さんは言う。

折しも今年は、園部藩が誕生して400年を迎える。「これをきっかけに、まず市民の方に、さまざまな取り組みを通して地元を誇

りと愛着を持ってもらい、一体感を醸成し、街を元気にするきっかけづくりをしたい。外に向けては、まだ知られていない歴史文化遺産

れてきた祭礼を、今回現存する1基の山車屋台を修復し、市民から参加者を募って、大規模な巡行を再現する。神輿や山車屋台を連ね、当時の侍や町衆に扮した参加者が生身天満宮から約4kmを巡行するという。

また、10月27日には「園部藩立藩400年シンポジウム」を開催。園部のお城や城下町の歴史文化を振り返り、次世代に伝承するため、研究者を招く。

「祭礼絵巻が京都府暫定登録文化財に登録されているほか、南丹市には180ほどの指定文化財があり、その中には全国でも貴重なものが数多くある。国内外に積極的に発信し、観光や産業振興につなげていきたい」と今井さん。

地域のファンづくりへ

プロジェクトは始まったばかりだが、住民の関心は徐々に高まっている。今後は、園部藩の藩主・小出吉親公を前面に打ち出していく予定だ。「中学生向けにこの地を治めていたお殿様がどんな人なのか、パネル展示などを通じて知ってもらい、外部の人にも伝えられるようにしていく。次世代を担う子供たちの歴史に対する意識を

を発信して、観光や商工の振興を図り、ひいては移住・定住にもつなげていきたいと考えている」と、中西さん。住民向けの施策を観光客誘致につなげ、さらには移住者獲得にもつなげようという考えだ。そのために18年10月、企画政策部、教育委員会、農林商工部、土木建築部など部署横断の南丹市魅力創出プロジェクトを立ち上げ、一丸となって取り組むことになった。

市民の手で大規模に祭礼再現

「ファースト天神、ラストキャッスル」を謳う取り組みは、1年を通して行われる。5月の連休には、商工会が中心となって園部城祭りを開催。歴史に関するトークショーや城下町体験プログラムを実施した。

夏休みには、小学生を対象とした体験講座を開き、お寺の暮らし、段ボールを使った甲冑づくり、からくり人形作りを通して、江戸時代の暮らしを実体験できる場を設けた。また、教員を対象とした夏



園部城跡。櫓門は園部高校の校門に使われている

高め、故郷の魅力を伝えられる人材を育てていきたい」と中西さんは言う。

来年のNHK大河ドラマには、南丹市にも縁のある明智光秀が登場する。歴史に関心が深まる機会を逃さず、京都市や亀岡市から南丹市へ足を延ばしてもらえよう、観光客に提案できる「ファースト天神、ラストキャッスル」のツールを準備していくという。地域にある歴史を掘り起こし、地域のファンをつくる取り組みは地道で息の長い仕事だ。地域に愛着を持つ人づくりへの挑戦は続く。